

湖北省の養蜂家を訪ねて

ジョン・ハミルトン

一九九三年北京で開催された国際養蜂会議の会場で初めて荆条蜂蜜という湖北省産の蜂蜜を試食した。以来、私はいつかこの蜂蜜の産地を訪れたいと考えていた。実に美味しかったからである。だが今回の旅行を事前に計画することは容易ではなかった。というのも中国行きの時間が取れるのは唯一二月で、それではミツバチが越冬しているか、せいぜいようやく活動を始めた頃になつてしまい適切な時期とはいえない。しかも、中国の正月にあたるこの時期は一億五千万の人が移動し、計画どおり目的地にたどり着けるか不安があった。従つて夕刻北京に到着した時も翌日の予定は全く決まっていなかった。ところが全てがうまく

い具合に運んだのである。

翌朝空港に行くのと十時半発武漢行きの航空券が手に入った。そこで私は朝食を摂りながら、丹念に湖北省に住む養蜂家達の住所を調べた。武漢市という大都市に三人、武漢市の北西、汽車で約三時間のところにある随州という小さな町に一人見つかった。私は随州に向かうことに決めた。荆条蜂蜜の産地だからである。武漢に着くと私は空港ターミナルからタクシーに相乗りして駅に向かった。同乗した人に行き先と目的について尋ねられ、私は随州にいる養蜂家を訪ね湖北省の養蜂について教えてもらうのだと答えた。またその養蜂家とは五年前に北京の養蜂会議で知り合ったのだが、実際に行ける

か確信がなかったので私が行くことは知らせていないことなどを話した。今回のような旅には、その会議でもらったカバンを持ち歩くようにしている。カバンに「一九九三年度第三十三回国際養蜂大会」と記されており、このカバンを見せれば中国に來た理由がわかつてもらえるので重宝している。

タクシーの同乗者は携帯電話を取り出し、随州の訪問先に連絡をしてあげようと申し出てくれた。私はためらった。当初の目的は、とりあえず随州に行くことだったからである。しかも大晦日だ。不意に訪れるのに最適な時とは言えないだろう。しかし、私はすぐに考え直した。そこで男性は電話で私が武昌から次の電車で向かう旨を伝えてくれたのである。そして養蜂家の知人は随州駅の改札口で私の名前を書いたプーカードを持って待つていると言ってくれた

のだ。(確かにプラカードは見えたが、随州駅で降りたのは私一人だった。)

私は広州発蘭州行きの本線列車に乗った。乗客は皆長旅のせいか変な外人を大歓迎してくれた。スニーカーからはヨハン・シュトラウスやチャイコフスキーの音楽が聞こえてきた。隣の座席の人たちはブリッジをしていた。隣に座った人が生姜、人参、さつまいもなどの野菜の砂糖漬けを一袋私にくれた。特に生姜は美味しかった。中国の鉄道は何度旅しても楽しい。

陳さんの家族にはこうして会えることになった。その夜夕食時に陳尚発氏は北京養蜂会議後のパーティーで撮った私の写真を探し出した。この会議には世界中から約三千人の養蜂家が出席していたのだが、約六分の一は中国人だった。しかし、外国人養蜂家達が中国語で話す努力をしている様子はなく

中国の養蜂家も英語を話さないの
でコミュニケーションが大変難し
かったのを覚えている。私の中国
語も大したことはないが少々は役
に立ったようだ。何しろこの言葉
の溝を埋めようとする外国人養蜂
家は私以外にいなかったのだか
ら。

とにかく我々は随州駅で顔を合
わせた。大晦日のことであつた。
陳尚発氏は二人の息子や友人達と
一緒に迎えにきてくれた。陳尚発
氏は鴻発蜂産品の社長で、長男の
陳真氏はマーケティング部門、
次男の陳元氏は随州のオフィスで
というように父のビジネスの手伝
いをしている。私は案内しても
らった随州で最も高級なホテルに
荷物を降ろすと陳さんのマンシ
ョンに行つて夕食をごちそうにな
つた。

陳さんのマンションは新棟の六
階にあつた。家族全員が正月を祝
うために集まっていた。彼らに交

じつて荊条蜂蜜入りの菊花茶を飲
みながら胡桃をいただくのは大変
光栄なことだった。その後、馳走
になった陳夫人の手料理、「三鮮」
「蛋餃」「蘑菇湯」も実に美味しか
つた。お客さんの中に陳社長の友人
とその二人の息子がいた。息子の
陳兵さんは武漢市で医師をしてお
り流暢な英語を話した。このよう
な席で英語を話す人がいて大変助
かった。その後はずっと中国語の
みのコミュニケーションにならざ
るを得なかったのだ。

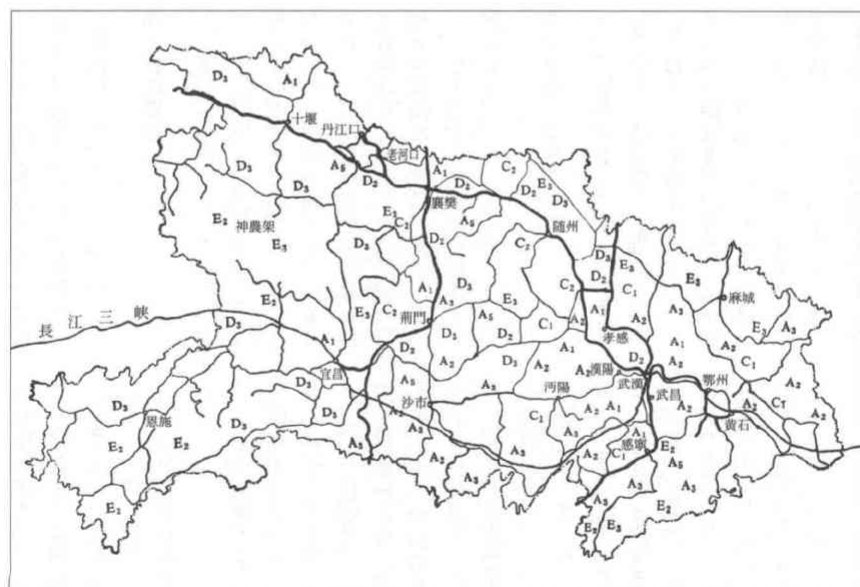
正月休暇で誰もが里帰りをして
いた。そこでその後数日は毎日随
州にある陳氏の親戚を訪ねて過
した。一緒に同行できたのは何と
も光栄なことであつた。マイクロ
バスタイプのタクシーに乗って出
発し、後ろからは二台のオートバ
イが随行した。行くところ行くこ
ろでご馳走になり、まるでス
コットランドのファーストフッ
ティング(年始回り)に行つた時

天南地北

のようであつた。

日本のおせち料理に似た色々な種類の美味しい料理が目前に並んだ。「元宵」というスープ、蜂蜜漬けのなつめ「蜜棗」、肉料理の「三鮮」、「春巻」、「又名湯」、そして「鯉魚」である。養蜂についての質問は前夜ノートに書きとめておいた。また、北京にある養蜂研究所が編集した『中国蜜粉源植物及其利用』という優れた本を持っていた。この本には、ミツバチが蜜を集める時期ごとの花の名前とその花が咲いている場所の地図が各省別についている。下図は私がその地図を参考にして描いた湖北省の主な蜜源植物の分布図である。

食事をしながら、ノートに書きとめておいた花の名前を見ては質問をした。「この花の蜜を集める時期は？ 蜂蜜の質は？ ミツバチが交配する植物の種類は？」答えが理解できなくてさんざん笑われ



湖北省主要蜜源植物分布図

A₁ナタネ A₂ソバ A₃ゴマ C₁レンゲ C₂「孩子」 D₂ニセアカシア
D₃ナンキンハゼ E₂ヒサカキ E₃タイワンニンジンボク

た時もあったが、そんな時はノートに書いてもらい辞書で調べ、それをもう一度清書した。そうすれば私が理解したことがわかってもらえるし、記録にもなる。湖北省の人は皆礼儀正しく、子どもたちは通常テーブルには近寄らず横のソファに座っていたが、今回は外で爆竹をして遊んでいることも多かった。女性客は奥さんの配膳の手伝いをしてから食事の席についた。食事には火酒がつきものだった。湖北省では、それぞれが思い思いに酒を飲んだりはいない。杯を持ち上げ誰かと視線が会うまで待つ。視線が会うとその人も杯を持ち上げ杯を合わせてから飲む。これが食事の間ずっと続くのである。火酒は大変強く、三日目には控えるようにして、代わりにレモネードを飲むようにしたらその晩体調を崩した。四日目にもまた飲み始めるとじきに回復した。そこで学んだことは火酒は飲み続

湖北省の養蜂

湖北省は中国の中央部に位置し、人口は約五千五百万人である。湖北省の西部には山が多く揚子江が四川から溪谷を通って宜昌市に流れ込む。南部は平地で昨夏は何度も洪水に見舞われた。武漢の行政上の首都は、武昌、漢口、漢陽の三都市である。随州は武漢の北西にある。

湖北省の主な蜜源植物

A1 Oilseed Rape (*Brassica campestris* L.): 中国語で「油菜」、日本語ではナタネである。ミツバチはこの花の蜂蜜を沢山作る。二種類あり、一方は二月にもう一方は三月に開花する。菜種の交配は収穫を促進するため、陳家では毎年この時期になると襄陽市の近くに巣

箱を移動する。

C1 Chinese Milkvetch (*Astragalus sinicus* L.): 中国語で「紫云英」、日本語ではレンゲである。随州周辺にはかなりの数のレンゲが見られる。

C2 Crow Vetch (*Vicia Cracca* L.): 中国語では「苣荬子」。常時栽培されるとは限らず市場の状況次第である。四月に開花。

D2 Black Locust (*Robinia Pseud-acacia* L.): 中国語で「東槐」。日本語ではニセアカシアである。五月に開花するが陳家のミツバチは湖北省のニセアカシアの蜜はあまり集めないようだ。

D3 Crow Cypress/Chinese Tallow Tree (*Sapindus sekeferum* (L.) Roxb.): 中国語で「烏柏」、日本語ではナンキンハゼである。この木は湖北省西部の山地で六月に花を咲かせるが特に神農架林区に多い。そのため陳家では大悟県に巣箱を移動する。

A₅ Oriental Sesame (*Sesamum indicum* L.): 中国語で“芝麻”、日本語ではゴマである。ゴマは六月初旬に開花し、ミツバチによる交配が特に重要である。ゴマから集める蜜は品質が悪くミツバチの飼料として使われる。

E₅ Chastetree (*Vitex negundo* var. *heterophylla* (Franch.) Rehd.): 中国語で“荆条”、日本語ではタイワンニンジンボクと呼ばれている。きれいな青い花をつける低木で、七月末から八月にかけて開花する。ミツバチは随州や後半では神農架林区一帯でこの花から大変上質な蜂蜜を作る。

A₅ Common Buckwheat (*Fagopyrum esculentum* Moench): 中国語で“蕎麦”、日本語ではソバである。八月から九月にかけて開花するが湖北省では主要な蜜源とはいえない。

E₂ Sweet Scented Osmanthus (*Eurya*): 中国語で“桧”、日本語

ではヒサカキと呼ばれている。湖北省の南部、武漢の南、崇陽近辺で十一月初旬に開花する。蜜の味は良いのだがミツバチはあまりこの花の蜜を集めようとしない。従って売値が高い。特に薬効はない。

私が持っている『中国蜜粉源植物』(徐万林著)にはこうした花のほとんどが美しい写真で納められている。徐万林氏には北京の会議で会った。住まいは黒竜江省にある牡丹江で、北東部の人によくあるように日本語が話せた。

二匹の女王蜂がいる巣箱

最後の日に、我々は随州郊外の村にある黄さん宅を訪れた。黄さんは家の裏に三十から四十基位の巣箱を置いていた。面白かったのはその多くに女王蜂が二匹いたことであった。英国でも日本でも二匹の女王蜂がいる巣箱は見たことがない。普通より細長い巣箱には



二匹の女王蜂がいる巣箱

蝶番のついた巢門が二つあり、中央下部には二匹の女王蜂が出くわさないように仕切りがしてあった。二つの巢門の間には双方の蜂が入り口を間違えないようにレンガが置いてあることが多かった。育房の上には女王蜂が入れないように隔玉板があり、蜜を蓄える巣箱を置いても双方のミツバチが同じ巣箱に蜜を入れるように工夫されている。この時期には育房の上にはプロポリス（蜂膠）を収集するためにマットがしいてあった。二匹の女王蜂の共存は可能なようだがもっと詳しく知りたいものだ。ある程度蜂の性格に拠るのではないかと思うのだが。

普通二月にミツバチを見ることはないのだが、その日はかなりの暖かさでミツバチが飛んでいたので巣箱を開けてみた。当然面布をかぶっている者はいないので、全員ひたすら静かにじっとしていた。養蜂家に蜂の前のみならず人

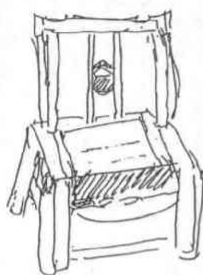
前でも寡黙な人が多い所以である。

巣枠は日本で使われているのと同じ形だった。陳社長によるとミツバチには砂糖ではなく胡麻の花蜜など安価な蜜を飼料として与え、春には天然花粉五〇%、トウモロコシ三〇%、卵と砂糖二〇%を混ぜ合わせた人口花粉を食べさせるそうだ。我々が訪れた時には巣箱と巣箱の間数か所に人口花粉が盛っており、蜜蜂はせつせとそれを集めていた。巣箱は盗まれないうように全て太い針金で互いに縛りつけてあった。また松の木の間に複数の棒を吊るして影ができるよう上手く工夫がしてあった。巣箱の素材はキリであった。

黄さん一家は白壁に囲まれた美しい新築の家に住んでおり、高い天井からは豚肉がぶらさがっている。どこからか豚の声が聞こえてきた。お爺さんが作ったというお米はひととき美味しかった。黄夫

人手作りのお米と蜂蜜と胡麻で作った米花糖という美味しいお菓子もいただいた。後に天津の市場でそれとよく似たお菓子を作っているのを見かけた。庭には犬がおり、二本の桜桃が今にも花を咲かせようとしていた。ここにも巣箱が二基置いてあり、蜜蜂は人間と同じ門から出入りしていた。陳社長は「便于観察」、つまり「ミツバチが一番便利な方法を編み出した」というような説明をした。家の中には湖北省のどの家にも必ずあるチャーミングな田舎風の家具が置いてあった。ヴァン・ゴッホが湖北省に來ることがあったら必ずやその椅子を描いていたことだろう。

陳家の巣箱には西洋ミツバチしかおらず、雲南省で使われているセラナ種のようなミツバチは全くいなかった。通常彼らが転飼のために湖北省から出ることはないが収穫が思わしくない時にはそうい



うこともあったらしい。夏になるとほとんどの巣箱は山中に置かれるため、一九九八年の平野部での洪水の影響を受けることもなかった。陳家の蜂蜜は「天然蜂蜜」のラベルをつけて売り出されている。お土産に荊条蜂蜜を四瓶持ち帰ったが大層喜ばれた。

香山県の養蜂研究所へ

随州のホテル滞在は随分高くつくだろうと心配していたが、陳社長のおかげで半額になった。その上陳社長は私を武漢まで送ってくれたのだった。七時十五分に漢口駅に着き、何と駅の外で切符を買い、七時三十二分発北京行きの汽車に乗り込んだ。十二時間の旅である。北京駅から天津市、南開大学愛大会館にたどり着くと私は暖かいお風呂に入り、二日間記録をしたり友人に連絡をしたりして過ごした。随州のホテルの人たちは非常に愛想が良かったが電話は故

障、レストランは年始で休業、風呂の湯は緑のスープのようだった。天津では「健力寶」という缶入りの蜂蜜飲料がよく売っていた。文字通り「健康は宝」といった意味だが、コークやペプシよりうんと良い。

北京滞在中に香山県の養蜂研究所を訪れ、副所長の呉傑氏および所長の張復興氏と有意義な話をすることが出来た。呉氏は以前花粉交配とミツバチの品種改良の研究のため2か月間ポーランドにいたそうで、中国におけるミツバチを使った交配について詳しい話を聞くことが出来た。湖北省では林檎の木の変配にミツバチが使われるそうだ。そういえば武漢の郊外に果樹園があった。また十一月から三月にかけては中国全土で温室栽培の胡瓜の変配にミツバチが使われるという。山東省の温室いちごや北京周辺の温室メロンの変配にもミツバチが役かっている。巢

箱の賃貸料は三週間で約二百元(三千円)だそうだ。

〈用具及び参考文献〉

養蜂会議カバン

中国製キルト地のロングコート(軍大衣)＝最近見かけないが列車内で寝たり隙間風の入る待合室や屋台での食事にはうってつけである。

『精選英漢漢英詞典』＝Commercial Press/オックスフォード大学出版及び拡大鏡

『中国地図冊』

『中国省別蜜源花集』

ノート

蜂よけ面布(使用せず)

北京養蜂会議のアドレス帳

中国養蜂学会、中国農業科学院蜜蜂研究所、黑竜江省牡丹江農業科学研究所共著『中国蜜粉源植物及其利用』農業出版社、一九九三年

徐万林『中国蜜粉源植物』黑竜江科学技術出版社、一九九二年

Ted Hooper, *Guide to Bees and Honey*, Third edition, Blandford, 1911.

Eva Crane, *Bees and Beekeeping*,

Science, Practice, and World Resources, Heinemann Newsnes, 1990.

林弥栄『日本の樹木』山と溪谷社、一九九六年

林弥栄『日本の樹木』山と溪谷社、一九九六年

〈協力いただいた方々〉

陳尚義 何宋元・王剛平 徐全義・張玉珍・徐玖 黄本志 吳傑

(愛知大学法学部教授) (邦訳 北岡真理)

方克立先生と中国現代新儒学の研究 劉 迪

その道に明るい人なら誰でも知っていることだが、哲学研究の領域で、方克立先生は早くに「正道の外へ出た」。一九六三年、中国の權威ある哲学雑誌『哲学研究』第四期に哲学界の大学者と対話する一編の文章が載った。題名を「孔子の仁」の研究方法について——馮友蘭先生と討議する」という論文で、その筆者がほかならぬ方克立先生であった。この文章におい

て、世の中に出たばかり、年とは言えわずかに二十五歳の先生は中国哲学界の大儒者馮友蘭に向かつて戦いを挑んだ。馮友蘭が孔子の仁学研究で提出した思想の「普遍的形式」の解釈、及びその適用に對して疑義を提出したのである。先生は哲学史の研究においては歴史的分析と階級的分析の方法をしつかり守らなければならないと主張した。